

中部の

エネルギーを 築いた

人々

“わが人生は闘争なり”の

松永安左工門 —その3—

松永安左工門は雅号「耳庵」について、「孔子さまは“吾十有五にして学に志し、三十にして立つ、四十にして惑わず、五十にして天命を知る、六十にして耳従い、七十にして心の欲するところに従いて矩を踰えず”と言っておられる。耳従うというのは人からどんな言葉を聴いても素直に受け入れられるということだ。けれどもなかなかそうもなれない自分なので、ぜひそうなりたいたいものだと思って60歳になって造った茶室の庵号に拝借したものである。お茶に安左工門でもおかしいし別名を唱えるのも面倒なので庵号をそのまま名乗っている。ところが、この耳庵、いまだに耳従わず、人の言うこともハイハイとばかり素直に聞いておれない。ことさらに異をたてたがる妙なくせがあって、我ながら少々困りものだと思っている。従って僕はまだまだ六十の修行年齢に達していないというわけである」と語っている。

このように茶の湯で耳庵の号を持ち、1939(昭和14)年、東邦電力株式会社解散後、電力界から一切手を引き、茶道三昧の生活に入った耳庵を紹介する。



数奇茶人の松永耳庵
(出典：電力の鬼・松永安左工門展)

茶道の始め

松永が茶道を始めたきっかけは、福岡黒田藩の藩士であった杉山茂丸翁から、茶器商篠田一釜庵の使いで、自動車いっばいに風呂敷包の箱に入れられた茶道具が目白の自宅に届けられた。それまで茶の気のない松永であったが、ただ好意を感謝して頂いた。

そのお礼に1935(昭和10)年、熱海の別荘「小雨荘」に杉山、福沢桃介らを招いて茶事を催した。杉山は、この席に内緒で益田鈍翁たちを招いていた。これがきっかけとなり、当時、鈍翁と共に茶道双璧の一人だった原三溪を柳瀬荘に招き、茶会を催した。以来、松永は鈍翁と三溪を茶道の師とするようになり、魅かれたように茶事に励んだ。

そして、生活に潤いをもたらすお茶として

贈られた茶道具一式

釜	古芦屋 松竹梅地紋
釜	甌口平丸釜 大西孝信極
花入	大徳寺大綱和尚作尺八 銘 宇治川
茶入	高取茄子 銘 飛鳥川
茶器	溜面取中次
茶碗	古萩 竹翠書付 銘 一花
茶碗	筒柳原焼
茶杓	覚々斎共筒 銘 ホネカワ
水指	瀬戸一重口
香合	宝珠
灰器	柳川焼
建水	銅袋形

「茶の湯とはただ湯をわかし茶をたてて飲むばかりなる本を知るべし」と言われるくらいで、元来茶の道には何の奇も変哲もない。いわば世間的な暮らし方に和、敬、清、寂を与えようとするに過ぎぬ。ただ湯をわかし、茶を点て、飲むばかりなり、これでええのだ。こうして一杯のお茶にでも落ち着いて自己を発見することができれば、何か必ず得るところがある。まず本の本の心を体得することである。また、ボクは還暦を過ぎてからこの道

に入ったが、必ずしも老いぼれの老いぼれ趣味に墮したわけではない。僕のお茶は僕のお茶として一流一派を立てたつもりである。薪を運び、水を汲み、食べ物を調べ、火を起し、茶をたてることなどすべて人手に任せず、自分自身で工面する。安い、よいものを探さず、安い、よいものをできるだけ生かすように工夫する。いわゆる「風流ならざるところまた風流」でこれが「生活茶」の心入れであり、風流の本体であると話している。

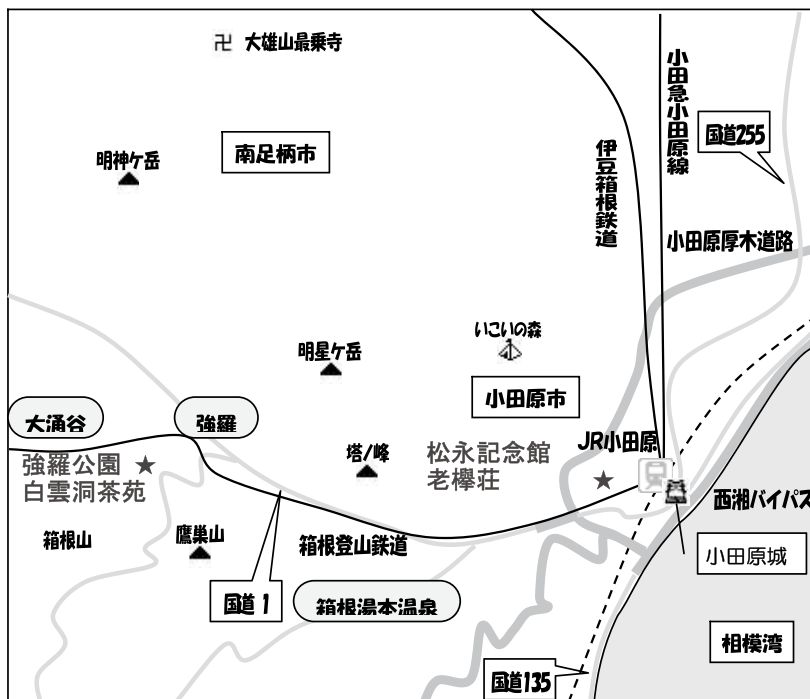
箱根・強羅公園にある白雲洞茶苑

白雲洞茶苑は、大正時代の初め、利休以来の茶人と称された益田鈍翁が創案した田舎家の茶室である。この茶苑は、1922(大正11)年に原三溪に譲られ、この時、三溪は新たに对字齋を増築した。そして1940(昭和15)年に耳庵に贈られた。このため、三人の茶人は近代数奇の「三大茶人」と呼ばれた。

益田孝：1909(明治42)年に三井合名会社を設立、理事長として三井財閥を確立した。

1914(大正3)年、退社後鈍翁と号し、千利休以来の大茶人と称された。

原富太郎：横浜の生糸貿易商として、富岡製糸場をはじめ各地に製糸工場を所有した。また、1920(大正9)年に横浜興信銀行の頭取となった。横浜市本牧に三溪園を造り、茶人として三溪と号した。三溪園は2006(平成18)年、国の名勝に指定された。



伊豆堂ヶ島に建てた一日庵

1939(昭和14)年、米国資本との合併で河津川電力を設立しようとしている頃、伊豆半島を歩き回った。そのさい堂ヶ島の茶屋に立寄った。駿河湾の岩山につかだしているさまが気に入り、また岩山の頂上に松が一本生えているのもいい。この堂ヶ島が売りに出されていた。

それならばと一万坪の土地と別荘「自炊庵」を1,500円で買った。松永は、香岐生まれで海が好きだったから、この堂ヶ島をこよなく愛

した。そして茶室「一日庵」を建てた。

この茶室を一日庵と名付けたのは、海辺から岩山を眺めているうちに、一夜にして墨俣城を築いた豊臣秀吉の真似がしたくなり、出入りの大工の棟梁に数寄屋造りの茶室を一夜で造らせてしまった。しかしこれには、前もっての大変な準備があったからのことで、何事も人を驚かすにはひそかな準備を必要としたのである。

国立博物館に寄贈された柳瀬荘

緩やかな丘陵の上であり、竹林と櫛林に囲まれた閑静な敷地(17,235㎡)の中に、天保年間、武蔵野に建てられた豪農の屋敷を譲り受け1930(昭和5)年「黄林閣」を建てた。

母屋から渡り廊下で別棟の「斜月亭」があり、数寄屋風の書院造りの三室で構成されている。この斜月亭に続いて、「久木庵」などが残されている。1948(昭和23)年、この山荘の美術品と共に東京国立博物館に寄贈された。

柳瀬荘に関する松永のエピソードに、年を取れば欲は少なくなるのだから、老後は必要最低限の暮らして十分ではないかと考えた。



柳瀬荘

ある若者に、「俺は先年、柳瀬の別荘を寄付したので大変金持ちになったよ」言ったところ、その若者は目を丸くして「あの柳瀬の大邸宅を国宝級の美術品をつけて無償で寄付してしまっ、それであなたが大変な金儲けをしたというのはどういうわけですか」と尋ねた。松永は「あんなべらぼうに大きいもの

を持っていまえ。女中、下男、掃除人までうんとおかねばならず、しょっちゅう手当、手入を怠ることはできないし、第一どのくらいの税金がとられるか、ちょっと算盤をはじくことは出来ないよ」と答えた。

松永の居宅・「老櫛荘」の小田原市松永記念館

1946(昭和21)年に柳瀬荘から小田原に移り住むために「老櫛荘」を建てた。敷地の入口

にそびえるケヤキの大木に因んで名づけられた。松永は、ここに当時の有名な茶人、政治家、

学者、建築家、画家などを招き茶会を催した。その後1959(昭和34)年、財団法人松永記念館を設立し、1階は美術品展示室に、2階は茶室として使用した。1979(昭和54)年に財団が解散し、その敷地と建物が小田原市に寄贈された。同年、小田原市は「小田原市郷土文化館分館松永記念館」を開設した。地元では一般的に松永記念館として親しまれている。



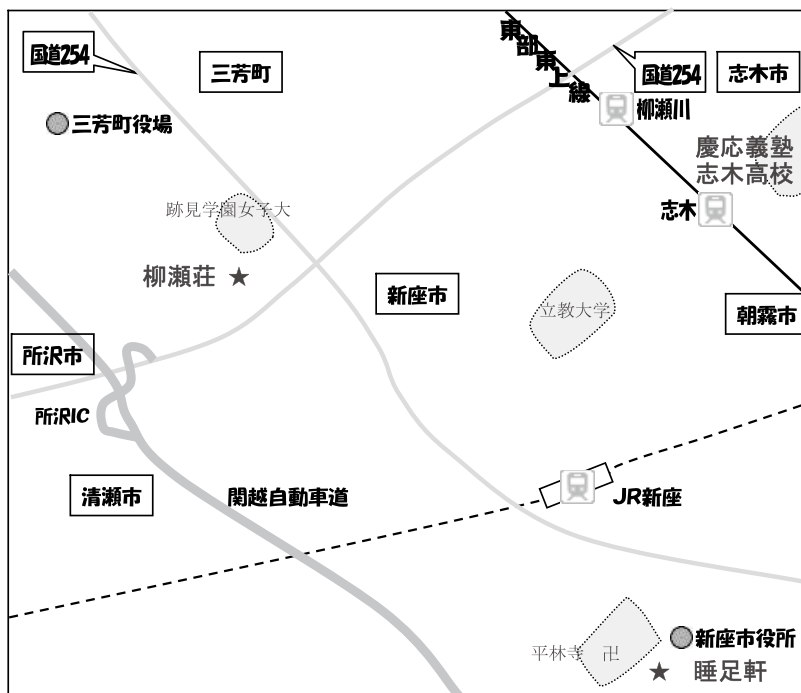
松永記念館

武蔵野の古刹・平林寺にある睡足軒

平林寺は、臨済宗妙心寺派で56ヘクタールの広さがある。武蔵野の面影を残し、国の天然記念物に指定されている「平林寺境内林」の一角に、修行僧の専門道場や松永の別荘・睡足軒等がある。この別荘は、1938(昭和13)年に原三溪の世話で飛騨高山付近の田舎家を移築した合掌造りの建物である。松永

は、この草庵に親しい茶人を招き暖炉を囲んで「田舎家の茶」を楽しんだ。

その後、1972(昭和47)年に睡足軒と敷地を平林寺に譲り、2002(平成14)年に平林寺から新座市に無償貸与された。なお、平林寺には、松永安左工門・一子夫妻の墓碑がある。
(寺澤 安正)



松永耳庵の茶室所在地